

脱俗の詩境とその生涯

上田都史

人間尾崎放哉



人間尾崎放哉 新装版

上田都史（うえだ とし）

（1906～1992年）京都生まれ。

俳人。生前は句作活動の他に、自由律の俳人、尾崎放哉や種田山頭火の紹介に尽力した。著書に「現代俳句の展望」、句集「喪失」「証言」「参加」、評伝「俳人山頭火」、随筆「茶の間の博物誌」等多数。

平成9年8月15日発行

著 者 上 田 都 史

発行者 小 島 米 雄

印刷所 井 上 印 刷

〒162
発行人 東京都新宿区市谷田町 2-31 株式会社 潮 文 社
電話東京 (3267) 7181 (代表)
振 替 00140-7-69107

© Toshi Ueda 1997 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえします

（越後堂製本）

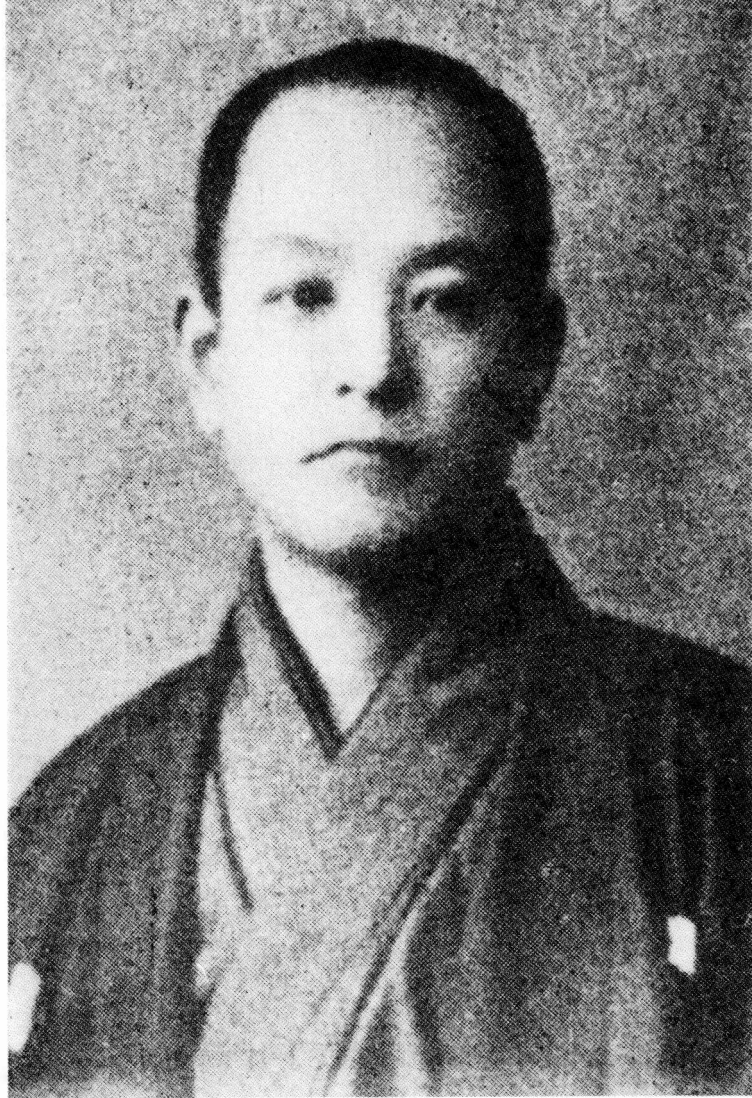
ISBN4-8063-1312-2

脱俗の詩境とその生涯

人間尾崎放哉

上田都史

潮文社



はじめに

入れものがない両手でうける

咳をしても一人

こんなよい月を一人で見て寝る

皆さんご存じの自由律の俳人尾崎放哉の俳句です。

放哉と種田山頭火は、同世代を生きた人でした。もう少し詳しくいえば、放哉が終わって、山頭火が始まりました。

放哉は「石は生きている。生きているが故に、その沈黙はますます意味深いものとなって行く」と、みずからは触れもせず、掴みもせずに、こみ上げる詩情を透明な虚無の中に詠っています。

山頭火は「生きることとは味わうことだ、酒は酒を味わうことによって、酒も生き、人も生き

る。女を抱きしめて女がわかるというものだ」と、みずから煩惱に喘ぎながら、愚直の詩を口ずさみました。

それぞれ異なった、人間不在と人間存在の二律背反、放浪流転、泥酔、そして恩愛への背徳等、波瀾万丈の人生を送ったのでした。

その生き方の異常にもかかわらず、多くの人達が、なぜ、彼らに惹かれるのでしょうか。

放哉も山頭火も、萩原井泉水の門下で、自由律俳句史上、かつてみない輝かしい句業を残しています。

この二人の奇人とも言える特異の生き方に、誰よりも温かい目で、その虚像と実像を追究し、弁護しながら、五年前に八十六歳で他界したのが、この本の著者上田都史でした。

放哉、山頭火と同じ井泉水に私淑し、傾倒し、生涯孤高の自由律俳句を継承しつづけた一人でした。

野の草花をこよなく愛し、すべての鳥、虫たちを慈しんだ人でした。

ふしぎな縁に結ばれた私は、定型俳句に身を置くものですが、起き伏しを共にした六年間は短いものでした。六人目の妻でした。大掃除と炊事に明け暮れた草深いこの家では、大百足と蜘蛛、ごきぶりに悩まされました。

彼は、構想が湧くと夏冬を問わず、未明の三時頃から書斎にこもり執筆するのです。夜型の私は困りました。又、心根の純粹さゆえに、外面の非常によろしい人でしたので、私は「平成の妖怪」と心得ておりました。

気骨と覇氣と誇り高い明治びとを貫き、最後まで今様殿様として見送れたことを、些かの自負としております。今は、その殿様好みの書斎を仏間にしつらえ、ほとけ心で話しかけている日々です。

この度、潮文社のご好意に甘え、よいしないことを、はじめて認めてみました。

放哉、山頭火から半世紀を経て、二十一世紀を目前にした現代の人々に、この本は、どのような反応をもたらすものなのでしょうか。

俳句を作る人も、作らない人も、ぜひ、一読をおすすめいたします。

一九九七年 入り盆の日

上田 多津子

目

次

はじめに……………五

汝、放哉生れたるか

届けられた弁当箱……………二五

山はどうも怖い……………三

東都遊学……………三七

平かならざる心

差引勘定は零……………三六

酒の功罪……………三九

俳句と放哉……………四四

海と放哉

鉄耕塾……………五七

心の底にあるもの……………三
捨てた恋……………六

酒と放哉

寝巻とタキシード……………七
「なあ、かをる」……………八
禁酒の約ならず……………九

放哉よ泣け泣け

最大の山場……………一七
一燈園へ……………二四
井泉水との再会……………二〇

比類ない安堵

真空の唄……………二七

松よ雀よさらば……………二五

ちんばの和尚……………二六

祝福しよう

橋畔亭……………二四

大慈悲……………二七

人間の富貴……………二五

流離の旅

あすから禁酒……………二六

井泉水よりの懇請……………二六

「当て」を当てにする……………二五

終の栖

焼米と焼豆……………一八

咳をしても一人……………一九

俗の丸出し……………一〇

不帰永遠の旅

墓と風と灯と……………二〇

戻つてくる放哉……………二〇

煙が出だした……………二二

尾崎放哉略年譜……………二三

汝、放哉生れたるか

届けられた弁当箱

尾崎放哉は一八八五年一月二十日、鳥取県の南郊、立川町一丁目慈姑田くわいだに生れ、秀雄と名づけられた。その前年一八八四年の六月十六日に萩原井泉水が東京都芝区神明町十一番地に呱呱の声をあげている。二つの生命がゆくりなくも第一高等学校で会したことから、尾崎放哉の歴史的魂の行脚を、ここに綴ることが出来るのである。

私たちをして後年尾崎放哉に注目せしめたのは、放哉にとってかけがえのない温情の師萩原井泉水がいたからである。病弱、孤独、貧窮、肉親との隔絶など放哉の晩年は悲慘の極みであるはずなのだが、何処かに救いが見え明るいのは、萩原井泉水の円光があるが故である。天分は発見者、熱烈な支持者なくしては遂に輝き出でないものである。聖なる墳墓はかくしてこの世ならぬ聖火の内にうち建てられ、やがて寂滅の灰をして永劫の名を俳句史上に止めしめたので